

聖書：ヨハネの黙示録 19：11～21

説教題：しかし、獣は捕らえられ

日時：2021年9月5日（朝拝）

ヨハネの黙示録もいよいよ終わりに近づいて来ました。その内容は次第に最後のさばきにより焦点が当てられたものとなって来ています。前回は大淫婦・大バビロンのさばきが語られました。それに続く今日の箇所では獣と偽預言者のさばきの幻が示されます。そして次の20章では竜すなわち悪魔のさばきが示されます。これはこれらが黙示録に登場して来た順番と逆になっています。振り返るとまず12章でサタンである竜が出て来ました。次に獣と偽預言者が13章に出て来ました。そして最後に大バビロン・大淫婦が出て来ました。しかしそのさばきについては反対に、まず大バビロンのさばき、次に獣と偽預言者、そして最後にサタンのさばきと記されます。私たちはこうして神の民を悩まして来た存在一つ一つがさばかれる幻を見るのです。ですからこれらは神の民にとっては救いと解放を意味するこの上ない喜ばしい知らせです。私たちはこれらを一つ一つ見るたびごとに神を一層賛美し、その救いを喜び祝うようにと招かれています。

まず今日の箇所最初の11節には白い馬に乗った方が現れます。これはこの後の描写から分かるようにイエス・キリストご自身のことです。ですからここは主の再臨の日のことを語っている部分と言えます。白馬は勝利者が乗る馬です。ローマ帝国の当時、凱旋将軍は白馬に乗って人々の前に現れました。キリストはやがての日に、そのような勝利者として現れます。ですから私たちは福音書で慣れ親しんでいるイエス様と同じイメージで、やがて来られる主を考えてはならないということです。主イエス様は一度目は低い姿で、見栄えのしないお方として来られました。しかし再臨の日には勝利者として、栄光と力に満ちたお方として来られます。11節後半に、その白い馬に「乗っている方は『確かで真実な方』と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる」とあります。「確かで真実な方」という表現は3章14節に出て来ました。キリストこそ信頼できる確かな方であり、偽りのない真実なお方です。その方は義をもってついにさばきを行います。「主よ、いつまでですか！」などともはやうめく必要はありません。

12節に「その目は燃える炎のようであり」とあります。これもすでに1章14節や

2章18節に出て来ました。キリストの目はすべてを見通す目であり、その前に一切のごまかしはききません。キリストはすべてのことを知り、目の前の悪をみな炎をもってさばく方です。また「その頭には多くの王冠があり」とあります。これまでサタンである竜には7つの王冠があり、また獣には10の王冠があったと言われて来ました。いずれもその権威の大きさ、偉大さを示すものでしたが、キリストの権威ははるかに勝ります。キリストをまねた竜や獣の王冠は数えられるのに対し、キリストの王冠は数えられないほどであり、その権威は比較にならないほど大きいことをこれは示しています。また12節の最後に「ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた」とありますが、これはこの方は極め尽くせないこと、人間の理解をはるかに超える偉大な方であることを示しています。

13節に「その方は血に染まった衣をまとい」とあります。ここで問題になるのは、この血は誰の血なのかということ。これはご自身の血なののでしょうか。とするとこれは十字架の贖いを象徴するものとなります。しかし多くの方は、これは敵をさばく際に浴びる返り血を象徴するものと言います。その理由は、この言葉が下敷きとしたと考えられるイザヤ書63章2～3節にこうあることです。『なぜ、あなたの装いは赤く、衣はぶどう踏みをする者のようなのですか。』『わたしはひとりでぶどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。』黙示録の14章20節でも主の再臨の日の光景としてこんな幻が示されていました。「都の外にあるその踏み場でぶどうが踏まれた。すると、血がその踏み場から流れ出て、馬のくつわの高さに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。」またその名は「神のことば」と呼ばれていたとあります。ヨハネの福音書1章1節に「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」とある通り、「ことば」という言葉は神を暗示する言葉です。ですからこれはキリストの神性を暗示する言葉かもしれません。あるいはこれはキリストは神のことば、すなわち神の約束を実現実行される方であること、特にさばきにおいてそれを成し遂げる方であることを指しているのかもしれません。

14節に「天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた」とあります。これは天使を指しているとする人もいますが、「きよい亜麻布」は前回の8節に出て来て、そこでは神の民を指していましたから、ここでも神の民を指して

いると取る人たちもいます。15 節に「この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた」とあります。同じことは 1 章 16 節ですでに言われていました。口は言葉が出て来るところで、これはキリストのことばが剣のような力を持つことを意味します。「鉄の杖」は、ここでは諸国の民を打つこととセットで出て来ていますから、「牧する」と訳すよりも「治める」(参照:新共同訳)と訳す方が良いように思います。また 15 節最後に「全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である」とあり、先ほどの 13 節の血に染まった衣はこれと関係していると考えられます。

そして 16 節には「その衣と、もものところには、『王の王、主の主』という名が記されていた」とあります。17 章 14 節で、いわゆるハルマゲドンの戦いで、王たちは子羊キリストに戦いを挑むが、子羊は彼らに打ち勝ちますと言われ、その理由として「子羊は主の主、王の王だからです」とありました。この世には多くの王、また多くの主がいます。私たちの上に立てられ、私たちの上に権威を持つ多くの器がいます。しかしキリストはそれらの主の主、また王の王、すべての支配者のさらに高く上にあるお方です。やがての再臨の日に私たちが仰ぎ見るキリストはこのようなお方です。すべての権威に勝る方として圧倒的力をもって現れる主なるお方なのです。

さて続く 17 節には最後の戦いに先立って一人の御使いが太陽の中に立ち、大いなる輝きを背景として語った言葉が記されます。彼は大声で中天を飛んでいるすべての鳥たちに言います。「さあ、神の大宴会に集まれ」と。一体どんな大宴会かと思って続きを読むと、そこにあるのはおどろおどろしい光景です。これから行われる戦いで滅ぼされる者たちの死肉を食え！というものです。死の大饗宴です。しかしこれも旧約聖書の言葉を背景にしたものです。エゼキエル書 39 章には神に逆らう勢力の象徴であるゴグとマゴグに対するさばきの言葉が出て来ます(ゴグとマゴグはこの後、20 章 8 節に出て来ます)。エゼキエル書 39 章 4 節にこうあります。「おまえと、おまえのすべての部隊、おまえとともにいる国々の民は、イスラエルの山々に倒れ、わたしはおまえをあらゆる種類の猛禽や野獣の餌食とする。」そして 17 節以降にこうあります。「人の子よ、神である主はこう言う。あらゆる種類の鳥と、あらゆる野の生き物に言え。『集まって来い。わたしがおまえたちのために屠るわたしのいけにえに、イスラエルの山々の上での大いなる祝宴に、四方から集まれ。おまえたちはその肉を食べ、その血を飲め。勇士たちの肉を食べ、地の君主たちの血を飲め。』」また 20 節:「おま

えたちはわたしの食卓で、馬や騎手、勇士やすべての戦士をたらふく食べる——神である主のことば。」まさにこれと同じです。そういう旧約聖書から言われて来たさばきがこれから行われるということです。それは確実になされるので、鳥たちよ、さあ集まって来い！とされている。黙示録 19 章に戻って 18 節には様々な階級の人たちが述べられています。王たち、千人隊長たち、力ある者たち、馬とそれに乗っている者たち、すべての自由人と奴隷たち、また小さい者や大きい者たち。地上における身分や立場の違いは、やがての日に何の助けにもなりません。神に逆らう獣や偽預言者に与するすべての者たちがさばかれることになります。

そうしていよいよ 19 節以降に最後の戦いの様子が描かれます。ここに「獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑む」とあります。ここからもこれは 16 章 14 節や 16 節で見た、いわゆるハルマゲドンの戦いと同じであることが分かります。またそれは先ほど触れた 17 章 14 節と同じです。またそれはこの後 20 章 7～10 節で言われることとも同じであると考えられます。ここからも、これまでも度々触れて来ましたように、このヨハネの黙示録は時系列で、時間的順序で書かれているのではないことが分かります。むしろ同一の出来事を様々なアングルから、様々な視点から繰り返し描くというスタイルで書かれていることが分かります。この 19 章最後に言われていることは、16 章 14 節で「神の大いなる日の戦い」と言われているものと同じです。獣すなわち歴史の最後に神に逆らって立つ究極的リーダーをかしらとして地の王たちが集まり、最後の戦いが行われるのです。

ところがです！その戦いはどのように展開するのかと思って、息をのんで目をやると、何とあっけない幕切れが 20 節に記されます。戦いが始まったかと思った次の瞬間、「しかし、獣は捕らえられた」と記され、あっという間に勝負は決してしまいます。つまりこの最後の戦いは決して長く続かないのです。キリストが現れた後、両者の死に物狂いの格闘が始まるわけではない。始まったと思いきや、始まったかまだ始まっていないか分からない内に、すぐ獣は捕らえられてしまいます。また偽預言者も捕らえられてしまいます。そして両者ともに燃える火の池へ投げ込まれた！と記されます。

いざ神が戦いに臨むと一瞬にして決着が付くというのは旧約聖書にも見られるものです。モーセ率いるイスラエルの民が紅海を渡って救われた時もそうでした。一瞬にして海が二つに分かれ、民はその間を渡り、エジプト軍が追いかけて来ると海は元

に戻り、勝負は一瞬にしてついてしまいました。またエリコの城壁もイスラエルの民が7日目に7回周り、角笛を吹き鳴らし、時の声を上げただけで、その瞬間にすべてが崩れ落ちました。またヒゼキヤ王の時代、アッシリアがエルサレムに攻め入り、人間的には絶望的な状況にありましたが、ヒゼキヤ王が主に祈ったところ、何と朝が明けると主の使いが敵の陣営の18万5千人を打ち殺していました。勝負は一夜にして、一瞬にして、ついていました。テサロニケ人への手紙第二2章でパウロは、歴史の最後に現れる究極的な反キリスト、不法の者について語っていますが、2章8節でこう述べています。「その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」つまり戦いにならないということです。それほどキリストが圧倒するということです。一瞬にして決着が付くのです。

そして獣も偽預言者も「生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれ」ます。硫黄と火はソドムとゴモラのさばきを思い起こさせます。燃える火の池は神の怒りを象徴します。生きたまま投げ込まれるとは、意識を持った状態で苦しみを味わうことを意味しますが、投げ込まれた後は絶命して意識がなくなるのでしょうか。これについては後の20章10節が参考になります。そこにも火と硫黄の池のことが出て来て、そこに獣も偽預言者もいると言われ、「彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」とあります。つまりそこで待っているのは永遠の苦しみであるということになります。

彼らだけではありません。最後の21節に「残りの者たちは」とあります。これは獣に従い、獣の側につくすべての人たちを指します。その彼らは馬に乗っている方の口から出る剣によって、すなわちキリストのさばきの宣言によって、殺され、鳥によって食われるとあります。これは獣や偽預言者とは取り扱いが違うということではないでしょう(20章15節参照)。ただこの「火の池に投げ込まれること」、また「空の鳥に食われること」といった2つのイメージを合わせて、このような恐ろしいさばきと報いを刈り取るということを言わんとしているのでしょう。

以上の箇所から私たちが今朝学ぶのは、ついにこの日は来るのだ!ということです。神と神の民に敵対して立つ獣と偽預言者がこのようにさばかれる日です。しかし私たちはここをただ他人事のようにして読むことはできません。さばかれるのは獣と偽預言者だけではありません。その彼らについている者たちも運命を共にすると言われていいます。ですから大切な問いは、では私はどっちについている者だろうかということ

です。神が送ってくださった救い主キリストの側につく者だろうか。それとも神に逆らって立つ獣の側につく者だろうか。自分は果たしてどちらの刻印を受けている者だろうか。主キリストを信じ、神の民の刻印を受けている者だろうか。それともさばきの日までこの世を支配する獣の刻印を受けている者だろうか。聖書はこのどちらかの刻印しかないと述べています。もしキリストにある刻印を受けていないなら、その人は獣の刻印を受けている人であり、ここで描かれているさばきがやがてその人に臨みます。果たして自分はどっちなのか、自分はどうか。そのことを今日の箇所から検討させられて、早くに主を信じ、主を受け入れる者へ、そして主がくださる勝利にあずかる者へ導かれたいと思います。

そしてもう一つ思うことは、私たちは獣が最後にこのようにさばかれることを見つけることによって獣を恐れなくて良いということです。獣とは神に逆らって立ち、神の民を攻撃し、迫害するこの世の国家権力や為政者などを指します。今の時代、獣は大きな力を持っているかもしれません。自分こそが絶対的な力を持つかのように振る舞い、従わない者を様々な仕方で脅してくるかもしれません。しかし獣は最後にさばかれます。あまりにもあっけなくその終わりの日が彼の上に臨みます。私たちはこの主が示してくださった幻を心に刻むことによって、やがて必ず敗北させられる獣を恐れるのではなく、主の主、王の王である方こそを恐れ、愛し敬う歩みへ進む者とされたいと思います。信仰者として歩むことが困難な環境や戦いの中でも、まことの主こそを告白し、この方にこそ従い続ける歩みへと。やがて主は白馬に乗って来られ、圧倒的な力を持って敵対する者たちをさばき、私たちを救い出してください。その日を見つめて今週も主に忠実に従い、主を証しし続ける歩みへ、そしてかの日に豊かに報われ、約束の栄光の救いへと入れていただく神の民の歩みへ導かれてまいりたいと思います。